

## 冬におすすめの本

姫路市立図書館

小学1・2年生むき

クリスマスの本

『クリスマスのまえのぼん』

クレメント・C・ムーア作 福音館書店 (Eーデ)

クリスマスのまえのぼんのことです。家のなかにはひっそりとしずまりかえっています。そのとき、そとのにわで、たいそうにぎやかな音がしました。セントニコラス(サンタクロース)のおとずれを、よろこびとたのしみいっぱいにえがいています。

『おおきいつリーちいさいツリー』・『大きいツリー小さいツリー』

ロバート・バリー作 大日本図書 (Eーバ)・(GYーバ)

クリスマスまじかのある日、ウィロビーさんのおやしきに、りっぱなツリーがとどきました。さっそく大ひろまにたててみると、てんじょうにつかえてしまいます。ツリーのさきは、きりおとされ、こまづかいのアデレードにひろわれました。ツリーのさきっぽはどんどん小さくなりながら、森のどうぶつたちにひろわれていきます。

『くんちゃんとふゆのパーティ』

ドロシー・マリノ作 ペンギン社 (Eーマ)

くんちゃんとはげきな子ぐまです。ふゆごもりのまえ、くんちゃんをはじめてゆきを見ます。外でゆきあそびをしていたくんちゃんは、ことりから、たべものがみつからなくてこまっていることをききます。そこでくんちゃんは、森のどうぶつや、じぶんたちがぞくのためにパーティをひらきます。

『ティリーのクリスマス』

フェイス・ジェイクス 作 こぐま社 (Eージ)

クリスマスの日、小さな木の人形ティリーは、友だちのエドワードをまっていたが、来ませんでした。まちへさがしに行ったティリーは、広いとおりをわたり、犬をおいはらい、やっと、やおやさんの高いたなにおきざりにされたエドワードを見つけ、たすけました。雪のなか、こんどは、エドワードがあきばこで作ったそりにティリーをのせて家にかえり、クリスマスをおいわいしました。

『クリスマスまであと九日 ——セシのポサダの日』

エッツ&ラバスティダ作 富山房 (Eーエ)

メキシコの小さな女の子セシは、はじめてじぶんのポサダをしてもらうことになりました。ポサダというのは、クリスマスのまえの九日間、まいばんちがうちでおこなわれるパーティーのことです。中におかしやくだものをつめたピニャタをつるしてみんなでわっておいわいします。セシは大きな金色の星の形のピニャタを買ってもらい、ポサダの日を心まちにします。

『ちいさなもみのき』

マーガレット・ワイズ・ブラウン作 バーバラ・クーニー絵 福音館書店 (Eーク)

のはらにひとりでたっていたちいさなもみのきは、ふゆのあるひ、あしのわるいおとこのこのへやにはこぼれて、クリスマスツリーになりました。はるになるとのはらにかえされ、ふゆになるとまた、おとこのこのへやにはこぼれました。けれどもつぎのふゆ、もみのきのむかえはきませんでした。おとこのこがあるいて、クリスマスの

おいわいにやってきたのです。

『しあわせなモミの木』

シャーロット・ゾロトウ文 童話屋 (GYーゾ)

お金もちの人たちがすんでいるとおりのあき家に、そまつなみなりのおじいさんが、ひっこしてきました。おじいさんはクリスマス・イブにかれかけたモミの木をかって家の前にうえました。だれもモミの木に見むきもしません。でもおじいさんはモミの木にはなしかけて、だいにそだてました。何年かたち、モミの木はおおきくなりました。あるクリスマスのあさ、モミの木には色とりどりの鳥たちがとまり、コーラスたいが木のしたで鳥たちと美しいうたごえをひびかせました。

『ババールとサンタクロース』

ジャン・ド・ブリュノフ作 評論社 (Eーフ)

ぞうの王さまババールは、これまでぞうのくにへサンタクロースがきたことがないのにきがつきました。そこで、ヨーロッパまででかけて、サンタクロースをさがし、ぞうのくにへきてくれるよう、じかにたのむことにしました。せかいじゅうのこどもたちにプレゼントをくばるいそがしいサンタクロースは、クリスマス・イブにぞうのくにのこどもたちのところにも、きてくれるのでしょうか。

小学1・2年生むき

冬におすすめの本

『大雪』

ゼリーナ・ヘンツ文 アロイス・カリジェ絵 岩波書店 (Eーカ)

ウルスリとフルリーナは、雪ふかい小さな村にすむ兄妹。明日は村の子どもたちのそり大会です。どの子どもそりをきれいにかざり、みんなをあっと言わせようと、したくにかかります。ウルスリはそりに毛糸の玉をかざることを思いつき、いやがるフルリーナをふもとの村までお使いに行かせました。さて、すっかりおそくなったフルリーナがかえり道をいそいでいると、とつぜん大きななだれがフルリーナにおそいかかってきます。

『かさじぞう』

瀬田貞二再話 赤羽末吉画 福音館書店 (Eーア)

大みそか、かさがさっぱりうれなかつたじいさんは、日がくれて、しかたなくもどるとちゅう、ゆきをかぶったじぞうさまに、うりもののかさ5つと、じぶんのかさまでかぶせてかえってきました。がんじつのあさ、じいさんをさがして、そりをひくこえがきこえてきます。こころのやさしいじいさんとばあさんが、しあわせになるおはなしです。

『もりのこびとたち』

エルサ・ベスコフ作 福音館書店 (Eーベ)

もりのこびとは5人きょうだい。もりのおくふかくに、住んでいます。夏はたのしくあそび、秋には冬のじゅんびでおおいそがし、冬はさむさをしのぐためほとんど家ですごし、そして春にはあたらしいのちとであります。こびとの1年が、いきいきとえがかれています。

『グレーラビットとヘアとスキレル スケートに行く』

アリスン・アトリー作 マーガレット・テンペスト絵 童話館出版 (GYーア)

ある朝、グレーラビットと大うさぎのヘアとりすのスキレルは、スケートに行きました。グレーラビットは、ヘアがころぶと、すべりよってなでてやり、子うさぎたちと、一れつに手をつないでいっしょにすべってやりました。他のどうぶつたちもいっしょにグレーラビットの作ったお弁当をたべ、三人がうきうきした気分をかえってくると、にわに、見なれないあしあとがありました。

『ジョシィ・スミスのおはなし』

マグダレン・ナブ作 福音館書店 (GY-ナ)

きょうは、おかあさんのおたんじょう日です。ジョシィは、プレゼントを買おうとはりきって、あきびんをひろったり、畑しごとやそうじを手伝ったりしてお金をため、お花やさんで大きなバラの花たばを買おうとします。「ジョシィ、おたんじょう日のプレゼントをかいにいく」。ほか、ジョシィのたのしいおはなしが、ぜんぶで3つ入っています。

『ふゆのものがたり』

ルース・エインズワース作 福音館書店 (GY-エ)

よなかに目がさめたダークがそとを見ると、黒い目がこちらをのぞきこんでいました。それはトナカイでした。ダークはトナカイと友だちになりました。家につれてかえりたかったのですが、トナカイは、こやに入れられるのはろうやとおなじだといっていやがりました。まい日、ダークはトナカイのせなかにのってあそびました。いつもは、すぐにもどってくれるのですが、あるつめたい風の日、トナカイはじぶんのすんでいる雪のつもった山まで、ダークをつれていきます。

『ちいさいロッタちゃん』

アストリッド・リンドグリーン作 偕成社 (GY-リ)

ロッタちゃんは、すえっこのみそっかすです。はやくお兄さんやお姉さんのように一人前にあそびたくてたまりません。たいひと雨でさくもつがそだつときいたロッタは、たいひの山で雨にうたれていれば、すぐにも大きくなれるのじゃないかと考えます。

『「イグルー」をつくる』 〈ちしきの本〉

ウーリ・ステルツァー写真・文 あすなろ書房(38-ス)

「イグルー」というのは、ほっきょくにすむイヌイットとよばれる人びとがくらす丸い雪の家のことです。イヌイットは狩りをしてくらすので、あちこちいどうしななければなりません。雪の家ならざいりょうにもこまりません。どんな大きな家でもつくることができます。さて四角い雪のブロックをどのように積み上げていけば丸いイグルーができるのでしょうか？ イグルーのしくみとこうぞうがよくわかる写真絵本です。

## 冬におすすめの本

姫路市立図書館

小学3・4年生むき

クリスマスの本

『スプーンおばさんのクリスマス』

アルフ・プリョイセン作 ビョーン・ベルイ絵 偕成社 (Eーベ)

クリスマスも近いある朝、おばさんが目ざめてみると、スプーンぐらいに小さくなっていることに気づきあわてます。今日はクリスマスの買い物をするために、だんなさんと村の市場へ行く予定だったのです。だんなさんときたら、クリスマスの飾りにはまったく無関心なので、とてもおばさんの思うとおりの買い物なんかしてくれそうにありません。そこで、おばさんは、こっそりおじさんのリュックサックに忍び込みました。ときどきティースプーンみたいに小さくなってしまおうおばさんと、気のいいおじさんのゆかいなお話です。

『クリスマスのものがたり』

フェリクス・ホフマンさく 福音館書店 (Eーホ)

2000年ちかいむかし、ユダヤのくにのナザレにマリヤというむすめがいました。ある日マリヤの前に天使がやってきて男の子のたんじょうをつげました。マリヤはベツレヘムの町のうまやで男の子をうみ、イエスとなづけました。イエスがうまれた夜、ひつじかいたちは天使のお告げをきき、イエスにおくりものをしました。同じ夜、ヨセフのゆめに天使があらわれ、エジプトにのがれるようにいいました。三人はながいたびにでました。イエス・キリストのたんじょうのものがたりを、格調高くえがいています。クリスマスのはじまりを知りたい人におすすめします。

『おもいででのクリスマスツリー』

グロリア・ヒューストンぶん バーバラ・クーニーえ ほるぷ出版 (Eーク)

ルーシーにはわすれられない思い出がありました。それは、村の教会のクリスマスツリーをルーシーの家でえらんだ年のことです。村のしきたりで、毎年こうたいできまった家が、村じゅうの人たちのためにツリーをたてているのですが、その年はもうすこしでツリーをたてそこなうところだったのです。

『グロースターの仕たて屋』

ビアトリクス・ポター作 福音館書店 (Eーポ)

クリスマスの数日前、まずしい仕たて屋は、市長殿がクリスマスに着る衣装の布を裁ちましたが、穴糸がひとかせ足りませんでした。猫のシンプキンが、仕たて屋に夕はんのねずみをにがされたので、買ってきた穴糸をかくします。衣装の期限は四日後だというのに仕たて屋は熱が出て、三日の間ねこんでしまいました。イブの夜、シンプキンが店をのぞくと、ねずみ達がうたいながら衣装をぬっていました。

『名馬キャリコ』

バージニア・リー・バートン作 岩波書店 (GYーバ)

西部のサボテン州にキャリコという馬がいました。キャリコはカウボーイのハンクの馬です。あるとき、すごみやスチンカーとその一味に牧場の牛たちをぬすまれてしまいます。キャリコはスチンカーのたどった足あとをつけて、スチンカーをつかまえます。賞金をもらったハンクは子どもたちにクリスマスのおくりものを買いにいきま

す。

『山のクリスマス』

ベームルマンズ文 岩波書店 (GYーベ)

町にすむ男の子ハンシは、クリスマス休みにおじさんの家に一人であそびに行くことになりました。おじさんの家は雲と同じくらい高いアルプスの山の上にあります。家族はおじさんとおばさん、いとこの女の子、そして犬と馬です。ハンシはスキーをしたり、シカのえさやりにいったり、クリスマスのお祝いをしたりして、すてきな冬休みをすごします。

『おもちゃ屋へいったトムテ』

エルサ・ベスコフ作 福音館書店 (GYーベ)

おもちゃ職人の家の屋根うらには、こびとのトムテ一家が住んでいました。ある夜のこと、トムテのヌッセはためしに人形の洋服を着てみます。そしてそのせいで、商品としておもちゃ屋に送られてしまいます。ショーウィンドウにかざられたヌッセは、必死に人形のふりをします。

『エーミルのクリスマス・パーティー』

アストリッド・リンドグレン作 岩波書店 (GYーリ)

スウェーデンの南の農場にすんでいるいたずらっこのエーミルの家が、今年のクリスマス・パーティーの会場です。村じゅうの人たちがあつまって、たのしいパーティーがはじまります。エーミルはお父さんにしかられ、いつものように閉じこめられたりもしますが、先生のおかげでパーティーはとてもすてきなものになります。

小学3・4年生むき

冬におすすめの本

『ゆきとトナカイのうた』

ボディル・ハグブリンク作 ポプラ社 (Eーハ)

北極に近いラップランドにはサーメとよばれる人々がいます。トナカイとともにいどうしながら、真冬以外はテントでくらしします。マリット・インガはサーメの5さいの女の子です。今年のたんじょう日にもらったトナカイの子はとてもきれいなのでシロという名前をつけました。マリット・インガの家族も真冬には木の家にすんでクリスマスをいわいます。地平線に太陽があらわれるようになったら春です。また高原をわたってテント村にかえっていく日もまちかです。とおい北国の大自然のなかで生きる女の子の秋から早春にかけてのくらしがいきいきとえがかれています。

『日本のむかしばなし』

瀬田貞二文 のら書店 (Yーセ)

大みそか、まずしいじいさんは、ばあさんのつくったおだまが売れなかったので、炭ととりかえてもどった。正月の米やさかなはなかったが、せめてもと火をおこしてあったまっていると、すみっこから黒っぽい小人が出てきて何やらひっこしをはじめた。だれだ、ときくと、びんぼう神で、あつくていどころがないのでおいとまする、という。(「年こしのたき火」)。そのほか12の日本のむかしばなしの本。

『雪だるまのひみつ』

ルース・エインズワース作 岩波書店 (GYーエ)

女の子のピッパは、雪だるまをつくりました。石炭で目と鼻をつくり、ぼうしとマフ

ラーをつけ、ニンジンで口をつくると、雪だるまはおしゃべりをはじめました。ピッパは雪だるまピーターキンにさそわれて、まよなかの雪だるまの集会にでかけ、歌をうたったり、あそんだりします。ピッパはきちんとつくられていない雪だるまたちを見て、いいことをおもいつきます。

### 『へムロック山のくま』

アリス・デリグレーシュ作 福音館書店 (GYーデ)

ジョナサンはある日おかあさんにたのまれて、ひとりでへムロック山のむこうに住むおばさんの家へ、大きなおなべをかりに行くことになりました。ジョナサンはおばさんの家につくとねむってしまい、帰るころには外は暗くなりはじめていました。雪のつもった山をなべをせおって登っていると、くまがゆっくり近づいてきて、ジョナサンはとっさにさかさにしたなべの中にかくれます。

### 『雪の森のリサベツ』

アストリッド・リンドグレン作 徳間書店 (GYーリ)

おねえちゃんのマディケンがねつをだしたので、リサベツはお手伝いさんとふたりでクリスマスの買い物にでかけました。お手伝いさんを待っているあいだに、リサベツは知らない人のそりに、おもわずとびのって、雪の森のなかでおきざりにされてしまいます。マディケンとサベツがでてくる話には、ほかに『クリスマスまつりサベツ』もあります。

### 『小さい魔女』

オトフリート・プロイスラー作 学研 (GYーブ)

むかしむかし、ふかい森のおくにひとりの小さい魔女がすんでいました。年はたったの127才で、魔女のなかまでは、まだひよこです。年に一度のワルプルギスの夜、こっそりおどりにしのびこんだ小さい魔女は、大きい魔女たちにつかまってしまいます。そして、魔女のおかしらと、来年のワルプルギスの夜までにいい魔女になるというやくそくをします。小さい魔女は、りこうなカラスのアブラクサスの意見をきいて、本当にいい魔女になろうとします。

### 『雪の上のあしあと』 〈ちしきの本〉

ジーン・ジョージ作 福音館書店 (48ージ)

どんな動物でも、地面の上を歩けば、必ず足あとを残すものです。そしてそれは、生活の記録ともなります。雪が積もった場所では、かなりはっきりと足あとが印されるものです。足あとがつづった記録をたよりに、まるで探偵小説のなぞときのように野生動物の生活を追求していきます。

### 『アラスカたんけん記』 〈ちしきの本〉

星野道夫作 福音館書店 (295ーホ)

アラスカは、今でもオオカミがいて、冬にはオーロラという光が空にあらわれるふしぎな国です。そこにはわたしたち日本人とよく似た顔をした、エスキモーの人たちがすんでいます。作者の星野さんがたいけんしたアラスカでの生活は、大自然にかこまれ、アザラン、セイウチ、カリブーなどをとって、食料や衣服を自分たちでまかなう、現代の日本のくらしとはかけはなれたものでした。カリブー・クマ・オーロラ・氷河など、アラスカの自然が美しい写真絵本です。